様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０６９９

研究課題名（和文）児童用ＷＴＣモデルの構築―外国語活動から中学校英語への円滑な移行を目指して

研究課題名（英文）Development of a WTC Model for Japanese Elementary School Students: To Bridge the Gap between Foreign Language Activities and English Education at Junior High School

研究代表者
物井　尚子（山賀尚子）（Monoi, Naoko）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０３５０５２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は2011年から公立小学校で開始された「外国語活動」について、児童の心的効果に着目し、(1)成人のWTC(Willingness to Communicate)モデルの構成要素が児童の心的概念として妥当かを検証すること、(2)日本人児童のWTCモデルを構築すること、を目的とした。2012年にWTC、国際的志向性、L2コミュニケーション能力の認知、L2コミュニケーションの不安、学習意欲、外向性が児童の心的概念として妥当であることを確認、また測定尺度を完成した。2014，2015年に関東圏の高学年児童(1,036名，1,415名)に質問紙調査を実施、日本人児童のWTCモデルを提案した。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the effects of the Foreign Language Activities initiated at public elementary school in the year 2011 on elementary school students' affective changes. Two objectives of this study were to investigate whether the six constituents of adults' WTC (Willingness to Communicate) model would work the same as the constituents of Japanese children's WTC model, and to create a WTC model for children. In the first year of this three-year study, six affective constituents (WTC, international posture, perceived competence in L2, communication anxiety in L2, language learning motivation, and extroversion) were validated as the affective constituents for children and an instrument was created to measure those constituents. In the last two years, the instrument was used on 5th and 6th graders at public school (1,036 participants in 2014, 1,415 participants in 2015) in the Kanto region and a WTC model for Japanese elementary school students was proposed based on the results.

研究分野：英語教育

キーワード：外国語活動　国際的志向性　学習意欲　WTC　児童用アンケート　小学校英語　外向性　自己効力感

１．研究開始当初の背景

平成 21 (2009) 年に現行の学習指導要領が告示され、それに基づき平成 23 (2011) 年度より「外国語活動」が 5, 6 年の児童を対象に必修化された。

「外国語活動」は週に 1 回、年間 35 単位時間、2 学年を合わせても 70 単位時間という時間的制約もあってか、技能の獲得は授業の目標には含まれておらず、「コミュニケーション能力の素地を培う」(文部科学省, 2008) という情意面の変容に大きな期待が寄せられていた。しかし、その「素地」が何を指すのかを明確化しなくては、本領域を課すことで児童にどのような効果があるのか、あるいはないのかを議論できない状態であった。

よって、本研究では教育心理学、社会心理学などの分野から WTC (Willingness to Communicate) を同義の概念と判断、本概念を研究の主軸として、日本人児童の有する心的概念としての妥当性、さらには他の心的概念との関連性を調査した。

２．研究の目的

本研究の目的は、「外国語活動」の児童の心的効果について WTC に着目し、

(1) 成人の WTC モデルの構成要素が児童の心的概念として存在しうるのかを確認すること

(2) 確認された構成要素を用いた日本人児童の WTC モデルを構築すること

の 2 点とした。

３．研究の方法

(1) 平成 25 年度は、文献研究とデータ収集期間として、WTC モデルの構成素となる WTC、国際的志向性、L2 コミュニケーション能力の認知、L2 コミュニケーションの不安、学習意欲、外向性の質問紙調査を作成することに時間を費やした。その尺度項目を先行研究から吟味、基本的に成人用尺度が主であったため、児童用に修正する作業を行った。その後、それらの尺度項目を児童に回答してもらい、実用性を確認した。公立小学校 5 校の児童 1,056 名のうち欠損値を持つ 70 名を除外した 986 名 (6 年生 453 名、5 年生 533 名) が調査に参加した。

(2)平成 26 年度は、尺度項目のスリム化のためのデータ収集期間とした。初年度に作成した 77 項目を 6 つの調査概念の信頼性を維持しつつ、44 項目に厳選、1 枚の質問紙に収めることができた。この質問紙を用い、公立小学校 7 校の児童 1,036 名のうち欠損値を持つ 58 名を除外した 978 名 (6 年生 481 名、5 年生 497 名) を対象に、外国語活動を受け始めた年度当初 (5 月) と年度末 (2～3 月) の 2 回の調査結果を分析、外国語活動の授業との関連性を調べた。このデータを基礎とし、高学年児童の WTC モデルを提案した。

(3) 平成 27 年度は、前年度に提案した WTC モデルの安定性を高めるため、引き続きの質問紙調査を実施した。調査対象は 2015 年 4 月～2016 年 3 月までの約 1 年間、外国語活動の授業を受けた公立小学校 7 校の児童 1,415 名 (6 年生 699 名、5 年生 716 名) とした。

なお、児童の英語運用能力との関連も明らかにするため、平成 26 年度より 3 校の児童 306 名 (5 年生 135 名, 6 年生 171 名) に対して英検 Jr. (ブロンズ) を実施した。

４．研究成果

平成 25 年度の研究成果を(1)～(3)にまとめる。

(1) 先行研究 (物井, 2013; 八木, 1987; Butler & Lee, 2006; Masgoret, Bernaus & Gardner, 2001; McCroskey, 1992, 2005; Nishida & Yashima, 2009; Yashima, 2002) を踏まえて成人の WTC モデルを構成する心的概念を測定するための 77 項目を児童用に修正した質問紙を作成した。探索的因子分析を行った結果、以下の 6 因子が抽出され、日本人児童の WTC モデルを構築するための構成素として確認された。6 因子とは、国際的志向性 (第 1 因子, 11 項目, α=.892)、L2 コミュニケーション能力の認知 (第 2 因子, 13 項目, α=.912)、WTC (第 3 因子, 9 項目, α=.883)、L2 コミュニケーションの不安 (第 4 因子, 8 項目, α=.824)、学習意欲 (第 5 因子, 7 項目, α=.908)、外向性 (第 6 因子, 5 項目, α=.769) である。77 の質問項目のうち 54 項目が上述の 6 因子に寄与した。また、項目の混在はなく、各因子は高い内的一貫性を有することが確認された。

(2) 次に、因子相関を計算し、２点の特徴を発見した (表 1)。まず、国際的志向性と L2 コミュニケーション能力の認知 (r = .509)、WTC (r = .580)、学習意欲(r = .580) との相関の高さが明らかにされた。これは、児童の WTC モデルでの国際的志向性の影響力が大きいことが予測できる。また、外向性が他の情意概念 (国際的志向性 (r = .255) 、L2 コミュニケーション能力の認知(r = .258)、WTC (r = .231)、学習意欲 (r = .234)、L2 コミュニケーションに関する不安 (r = .368)) に対して一定した影響力の大きさを示した。

表１　6 因子間の相関行列

	IP	PC	WTC	Mot.	CA	Extro.
IP	---					
PC	.509**	---				
WTC	.580**	.496**	---			
Mot.	.707**	.566**	.606**	---		
CA	.003	.230**	.069*	.038	---	
Extro.	.255**	.258**	.231**	.234**	.368**	---

注 1．CA = L2 コミュニケーションに関する不安, Extroversion = 外向性, IP = 国際的嗜好性, Mot. = 学習意欲, PC = L2 によるコミュニケーション能力の認知.

注 2. ** = p < .01, * = p < .05, two-tailed, N = 970.

(3) 上述の相関行列より明らかになった小学生児童の保有する心的概念の関係性をさらに深く分析するために、共分散構造分析モデルを用いた解析を行った。その結果、以下のようなモデルの構築が可能となった。

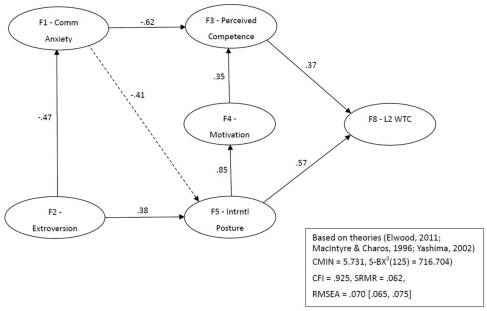

図１ 日本人児童の WTC モデルを示したパス図

このパス図は適合度指標が SBχ^2= 716.704, CFI = .925, SRMR = .062, RMSEA=.070 [.065, .075]であり、全体として比較的バランスのとれたモデルであると考えられる。

まず、国際的志向性から学習意欲へのパスが .85 と非常に高い数値を示している (Yashima (2002) では .79、Zenuk-Nishide & Shimizu (2004)では.73)。つまり、児童の国際的志向性が学習意欲の向上に大きく影響していることがわかる。さらに、その動機付けから L2 コミュニケーション能力の認知 (.35)、さらには WTC (.37) とパスがつながっており、学習意欲の高まりが、児童の英語運用能力の認知に影響、そしてそれがコミュニケーションを取ろうとする意欲につながっており、WTC への間接効果をもたらしていた。また、国際的志向性から WTC への直接効果が確認された (.57)。小学生を対象とした外国語活動という場でも、国際的志向性の高まりは WTC の向上に不可欠であることが明らかになった。

外向性については、L2 コミュニケーションに関する不安 (-.47)、国際的志向性 (.38) へのパスが出ている。外向性という性格傾向が、L2 コミュニケーションに関する不安と負の相関、そして国際的志向性との間に一定の正の相関がみられた。

このモデルを基に、平成 26 年度の調査では 1 年間の外国語活動の経験の前後で、6 つの心的概念がどのような変容を遂げるかを確認した。

(4) 6 つの心的概念を測定する 77 の質問紙項目を 44 に厳選した。この尺度を用い、公立小学校 7 校において外国語活動を受け始めた年度当初 (5 月) と年度末 (2〜3 月) に調査、外国語活動の授業との関連性を探った。学年と調査時期を 2 つの独立変数として二元配置分散分析を行った結果、年度当初と年度末の 2 回の調査間に統計的な有意差が確認できたのは、L2 によるコミュニケーション能力の認知 ($F(1, 976) = 55.58$, $p < .001$, partial $\eta^2 = .054$) と L2 コミュニケーションに関する不安 ($F(1, 976) = 40.52$, $p < .001$, partial $\eta^2 = .040$) の 2 概念であった。

また、学年の主効果が有意であったのは外向性 ($F(1, 976) = 7.11$, $p = .008$, partial $\eta^2 = .007$)、WTC ($F(1, 976) = 15.38$, $p < .001$, partial $\eta^2 = .016$)の 2 概念においてであり、5 年生が 6 年生を統計的な有意差をもって上回った。

国際的志向性および学習意欲については、交互作用が見られた(国際的志向性は $F(1, 976) = 4.99$, $p = .026$, partial $\eta^2 = .005$, 学習意欲は $F(1, 976) = 13.96$, $p < .001$, partial $\eta^2 = .014$)。ただし、ともに効果量が小さく、誤差の可能性も否定できない。6 年生は年度末に国際的志向性、学習意欲の数値が増加しているのに対し、5 年生は国際的志向性の数値の伸びが緩やかであったこと、また学習意欲については若干数値を下げている現状があった。これらの結果は、平成 27 年においても同様の結果が得られた。

平成 27 年度独自の取り組みを以下にまとめる。

(5) 先行研究 (バトラー後藤・武内, 2005, 2006; ベネッセ総合研究所, 2001) より、自己評価 (本研究では L2 コミュニケーション能力の認知)と英語運用能力との関連を明らかにするため、3 校 306 名の児童に対して英検 Jr. (ブロンズ) を実施した。その結果、英検 Jr.の総合得点と L2 コミュニケーション能力の認知との間に弱い正の相関 ($r = .30$)、さらに会話問題の成績との間に弱い正の相関 ($r = .32$) が確認された。McCroskey & Richmond (1991), Gregersen & MacIntyre (2014) は、コミュニケーション能力は実際の能力 (意識していない能力) よりも自己評価 (意識している能力) によって説明されるとして自己評価の重要性を指摘している。今後の方向性として、さらに多くの児童を対象に英語運用能力の調査を実施し、児童用 WTC モデルに組み込むことを予定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①物井尚子、Personal Report of Communication Apprehension (PRCA-24)を用いた質問紙調査における肯定表現もしくは否定表現を含む項目への大学生の反応、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、第 64 号, 2016、1-7

②物井尚子、日本人児童の WTC モデルの構築—質問紙調査から見えてくるもの—、児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要、査読有、第

34 号、2015、1-20

③Monoi, N., & Elwood, J. A., Measuring carefully: Validating the International Posture-Child Instrument, JALT Journal, 37, 2015, 査読有, 119-146

④物井尚子、質問紙における肯定，否定の項目表現が児童の回答にもたらす影響、児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要、査読有、第 33 号、2014、23-37

⑤物井尚子、小学校外国語活動にみる児童の国際的志向性、児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要、査読有、第 32 号、2013、19-35

〔学会発表〕（計 9 件）

①Monoi, N., & Elwood, J. A., Early English: Investigating a WTC Model for Japanese Elementary School Children, JALT (the Japan Association for Langauge Teaching) 2016, 2016 年 11 月 25 日～28 日. 愛知県産業労働センター（愛知県・名古屋市）

②物井尚子、児童の英語運用の運用能力と自己評価の関係を探る—2 年間の質問紙調査と児童英検を用いて—、外国語教育メディア(LET)2016 全国研究大会、2016 年 8 月 7 日～９日、早稲田大学（東京都・新宿区）

③物井尚子、外国語活動による児童の WTC モデルの変化を追う—1 年間の質問紙調査から—、第 39 回関東甲信越英語教育学会(KATE)山梨研究大会、2015 年 8 月 7 日、帝京科学大学（山梨県・山梨市）

④物井尚子、児童の L2 コミュニケーションに関する自己評価と英語運用能力の関係を探る—質問紙調査と児童英検を用いて—、第 15 回小学校英語教育学会(JES)広島大会、2015 年 7 月 26 日、広島大学（広島県・広島市）

⑤Monoi, N, & Elwood, J. A., Toward Understanding the Development of “International Posture” in Japanese Elementary School Students: Validating the International Posture-Children Instrument, 2014 年 11 月 24 日、つくば国際会議場（茨城県・つくば市）

⑥Monoi, N., Direction of Wording and Responses to Items to Personal Report of Communication Apprehension (PRCA-24), the JACET 53rd International Convention. 2014 年 8 月 28 日、広島市立大学（広島県・広島市）

⑦物井尚子、児童のための WTC モデルを探る—質問紙調査を用いて—、第 14 回小学校英語教育学会（JES)、2014 年 7 月 27 日、関東学院大学（神奈川県・横浜市）

⑧物井尚子、質問紙は児童の心理を正しく反映しているか—児童を対象とした質問紙における肯定および否定表現が回答にもたらす影響—、児童英語教育学会(JASTEC)第 35 回全国大会、2014 年 6 月 29 日、青山学院大学（東京都・渋谷区）

⑨物井尚子、小学校外国語活動にみる児童の国際的志向性、児童英語教育学会(JASTEC)第 33 回全国大会、2012 年 7 月 1 日、昭和女子大学（東京都・世田谷区）

６．研究組織

(1)研究代表者

物井　尚子（MONOI NAOKO）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70350527